

博物館だより

No.26

平成20年6月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
TEL 0930-33-4666
FAX 0930-33-4667

霊山『蔵持』の遺産展 6月15日まで開催中!

当館では6月15日(日)まで企画展「霊山・蔵持の遺産展」を開催しています。

蔵持山は、英彦山六峰の一つに数えられる修験の霊山です。今回の企画展では、火災などの難を逃れて今に伝わる蔵持山の文化財約50点を展示しています。

普段は目にすることの出来ない貴重な品々ばかりです。ぜひ、ご来館ください。

■会期 6月15日(日)まで

■場所 当館展示室

■観覧料 常設展の観覧料で
ご覧いただけます。



霊山『蔵持山』の遺産展

■主な展示品

- ・金銅十一面観音懸仏
(県指定文化財・鎌倉時代)
- ・銅製鱧口
(県指定文化財・室町時代)
- ・松会祭礼用鉄製鉞
(町指定文化財・江戸時代)

* * * * *

博物館友の会

総会開催

5月11日(日)、当館研修室において、平成20年度博物館友の会総会が開催されました。総会では前年度事業報告・決算報告、20年度の事業計画案・予算案が提案されましたが、いずれも全会一致で承認されました。

【20年度友の会主要事業】

上半期

- 7月27日 史跡散策バスハイク 九州国立博物館特別展他
- 6月7日 歴史たんけんウォーク 身近な文化財めぐり(豊津)
- 8月24日 文化講演会



5/11 博物館友の会総会

北九州大学 八百啓介教授

「江戸時代の外交」(仮題)

○9月28日

歴史たんけんウォーク

身近な文化財めぐり(犀川)

○10月12日

歴史たんけんウォーク

身近な文化財めぐり(勝山)

下半期

▽11月(実施日未定) 神楽見学会

見学先はアンケート結果による

▽11月23日

史跡散策バスハイク

行き先はアンケート結果による

▽1月・3月(実施日未定) 文化講演会

講師はアンケート結果による

▽3月15日

伝統民俗芸能鑑賞会

天彦山御田祭鑑賞

《古文書解読コーナー》

① 為取

② 〈ヒント〉ペリ

③ 将

④ 〈ヒント〉〇〇の将、兵を語らず

⑤ 碧

⑥ 〈ヒント〉ピクトリ

⑦ 雲

⑧ 〈ヒント〉ほめる、こらしめる

⑨ 王

⑩ 〈ヒント〉一度の便り。一報。

◎ 答え

(反対向きにみてください)

- ① 為取
- ② 車箱
- ③ 将
- ④ 碧
- ⑤ 雲
- ⑥ 王
- ⑦ 雲
- ⑧ 碧
- ⑨ 王
- ⑩ 為取

知ってるつもりでのヒト・モノ・コトに意外なドラマが：

みやこの歴史発見伝 15

宿駅のすがた ① 新町村

宿駅・新町村

江戸時代、京都郡新町村(現みやこ町勝山松田)は、「香春道」と呼ばれた街道の宿駅(宿場町)でした。香春道は、中津街道の宿駅・築城郡稚田村(現築上町稚田)と、秋月街道の宿駅・田川郡香春町(現田川郡香春町香春)とを結ぶ脇道で、新町村はその途中に設けられた唯一の宿駅でした。

宿駅とは、幕府や藩の公用旅行者のために、人や馬を提供する「人馬継立」の役目を負った町・村で、街道沿いに二〜五里程度の間隔で置かれました。徳川幕府は、関ヶ原合戦直後から、江戸を起点とした五街道の整備を進めましたが、地方の脇街道でも幕府の例にならって宿駅・交通路の整備が進められます。小倉小笠原藩では寛文年間(一六六一〜一六七三)を中心とした時期に宿駅が整備されたといわれています。

新町村は、その名の示すとおり「新しい町」で、江戸時代の



▲新町の位置 国土地理院5万分の1「行橋」より

初期、正保年間(一六四四〜一六四八)に作成された「正保国絵図」では「上久保之内新町」とあり、かつては上久保村の一部であったことが知られます。町の起こりに関する伝承として、新町に大原八幡神社(上久保)の御旅所があり、その夜市の賑わいから町に発展したという伝承(福岡県史 民俗資料編)と、上久保村の住人が旅人相手の餅屋を開いたのが町の始まりとする伝承(平



▲現在の新町

凡社「福岡県の地名」の二つがあります。

元禄七年(一六九四)五月五日、福岡藩の儒学者・貝原益軒は旅の途中に新町村を通過しますが、その紀行文『豊国紀行』で新町を「馬駅也」と記しているので、少なくとも、この時までには宿駅として機能していたようです。町のようす

宿駅は、公用の人馬継立という役目を負う一方で、旅人が宿泊し、道沿いには両側町が形成されて、様々な商売の店が軒を連ねる場所でした。そこは旅人がもたらした噂話などを聞くことのできる情報センターであり、また日用品などを調達できるショッピングセンターでもありました。

時代は下りますが、明治三年(一八七〇)の段階で、新町村の

数は七〇軒(人口は三三三人で、そのうち五五軒が藩(当時豊津藩)から鑑札(営業許可証)を受けて何らかの商売をしていました。左の表はそれをまとめたもので、幕末・明治維新期における新町村の商売の様子をうかがうことができます。鑑札の総数は一〇八枚でしたが(約半数が複数の鑑札を所持。最高は六枚、際立っているのが「魚商」の多さです。これは、小倉藩が宿駅以外で魚屋を開くことを制限していたことに理由があると思われる(国作手永大庄屋嘉永元年日記三月二九条)。なぜ、そのような制限をしたのか不明です

明治3年(1870)京都郡新町村の商売鑑札(営業許可証)の数

		上段：商売名		下段：鑑札数			
魚商	雑菓子	小店	棒商	中店	宿屋	大店	塩商
24	11	11	8	8	6	5	4
室屋	板場	醤油手造	酒造	水車屋	質屋	紺屋	鍛冶屋
4	3	3	3	3	2	2	2
猪口酒	板場	合業	瓦焼	瀬戸物店売	傘張	桶屋	合計
2	2	1	1	1	1	1	108

【史料】「明治三年京都郡新町村人別男女御改帳」(個人蔵)

※大店は穀類・反物・小間物・筆・紙・墨・油・酢・醤油その他荒物を店売り
 ※小店は餅・菓子・小間物・草履・草鞋類を店売り
 ※中店の販売内容は未詳

が、結果として、農山村に住む人が魚を買うには、宿駅に行くか、または宿駅の魚屋が行商に来るのを待つしかなかったのです。いわば「魚商」は宿駅商人の専売のようなもので、だから新町村にも魚商鑑札を持つ人が多かったのでしょう。

宿駅の「空気」

新町村の木村徳右衛門(生年未詳一七八二)は、宝暦一四年(一七六四)に生花「真古流」の名跡を福岡の一国庵花頭(千葉官蔵)から継ぎ、以後代々木村家当主が相伝しました。こういった文化的な深みは、人・物・情報が行き交うことで醸成された町場的な「空気」の中で素地が生まれたものでしょう。

京都郡上稗田村(現行橋市)の漢詩人・村上仏山は、明治五年(一八七三)頃の秋、新町村の宿屋に泊まり、「宿新町駅(新町駅に宿す)」という題で漢詩を詠んでいます。少し物悲しい秋の夜、四〇年以上前に旅した奈良吉野山近くにある宿駅の旅館を思い出し、感傷に浸った詩です。宿駅に漂う独特の「空気」のようなものが、仏山に遠い記憶を呼び起こさせたのでしょうか。

(川本英紀)